

○ 「New MQL4 ; 標準クラスを使ってみる (初めの二歩目)」 2014.09.01

・ アメンボです、

クラスを使いこなすのは難しい！ (アメンボの感想)

と、言うわけで「標準クラス」の活用に焦点を絞っているアメンボは、

当面の間は「MQL5の遺産を掘り起こし」ではNewMQL4で使えるか否かを試しています。

・ なぜ、標準クラス・ライブラリに拘(こだわ)るか、

チョット複雑な処理のコードを書いてみると判ります。

標準関数で書くより、標準クラスを使った方が圧倒的に簡単で短いコードで済むからです。

(でも、なんて初心者用の資料が少ないのでしょうか！)

・ ところで、NewMQL4 (Build600以降) ですが、

つい数週間前にはMQL4_Referenceに載っているのにコンパイル・エラーになった関数が、

新しいバージョンでは使えるようになっていて、と、言う状況に気が付きましたか？

「MQL4_Reference」に載っている内容は最終的に全てサポートされる、と推測しています。

<本稿で使用した MQL4 コード>

※※使用コードと「textdisplay.mqh」ファイルを添付しました。

「new_mql4_2014_09_01.zip ; New MQL4 標準クラス (二歩目)」 (ZIP 形式圧縮)

※本稿は「MT4 ; version 4.00 Build670」「MetaEditor ; version 5.00 Buid934」にて確認済み。

目次 :

- | | |
|---|-----------|
| 1. 標準クラスの調査進捗表 | ・ ・ P 2 |
| 2. 基礎の解析 (小さな一歩) ; スクリプトで試す | ・ ・ P 3 |
| (1) 「Label クラス ; CChartObjectLabel」を使ってみる | |
| (2) 「RectLabel クラス」と「Label クラス」を一緒に試してみる | |
| (3) コード解説 | |
| 3. インディケータに拡張するには (ヒントのみ) | ・ ・ P 9 |
| (1) 「Label クラス」 + 「Button クラス」の場合 | |
| 4. 実用的な応用例 (MQL5 の遺産から) | ・ ・ P 1 1 |
| (1) 本稿で実現する内容 (実現仕様) | |
| (2) 準備 (ヘッダファイルの設定) | |
| (3) 使用コード (PriceList_03.mq4) | |
| (4) 実行結果 | |
| 5. 応用例の解説 | ・ ・ P 1 5 |
| (1) 基礎知識 (TextDisplay.mqh を読み解くための) | |
| (2) 応用クラスを使ってテーブルを作成する | |
| (3) 少し詳細に応用クラスを解説する | |
| (4) 使用コード (PriceList_03.mq4) をブロック単位で把握する | |

1. 標準クラスの調査進捗表

※New_MQL4 の資料が余りに少ないので、MQL5 の過去の資料を掘り起こしながら進めています。

<全体像；クラスを利用するための「.mqh」ファイルが在る場所>

MQL5；ライブラリの種類	MQL5； Include¥ **	NewMQL4； Include¥ **	New_MQL4；Location 内容と「ホルダ有無」
<u>Base class</u>	¥	¥	本稿で一部使用・解説
<u>Classes of data</u>	¥Arrays¥	¥Arrays¥	本稿で一部使用・解説
<u>Classes for file operations</u>	¥Files¥	¥Files¥	未確認
<u>Classes for string operations</u>	¥Strings¥	¥Strings¥	未確認
<u>Classes for graphic objects</u>	¥Objects¥	¥Object.mqh	「フォルダ無い!？」 ※1
(<u>Classes for chart objects</u>)	無い!	¥ChartObjects¥	本稿で一部使用・解説※2
<u>Class for creating custom graphics</u>	¥Canvas¥	¥Canvas¥	済；チョット使ってみた
<u>Class for working with chart</u>	¥Charts¥	¥Charts¥	未確認
<u>Technical indicators</u>	¥Indicators¥	¥Indicators¥	未確認
<u>Trade classes</u>	¥Trade¥	－見当たらず－	「無い!？」
<u>Trading strategy classes</u>	¥Expert¥	－見当たらず－	「無い!？」
<u>Classes for creation of control panels and dialogs</u>	¥Controls¥	¥Controls¥	未確認

※1；MQL5 に比較すると、専用フォルダは無くなって、「Object.mqh」ファイルが Base_class として存在してる。(本稿のコードでも継承しています)

※2；「¥ChartObjects フォルダ」は MQL5 では「¥Objects¥」の Base_class として収録されている。

<New_MQL4 の Include 時ベース・フォルダ「MQL4¥Include」内の構成>

名前	更新日時	種類	サイズ
Arrays	2014/04/26 19:13	ファイル フォルダ	
Canvas	2014/04/26 19:13	ファイル フォルダ	
ChartObjects	2014/04/26 19:13	ファイル フォルダ	
Charts	2014/04/26 19:13	ファイル フォルダ	
Controls	2014/04/26 19:13	ファイル フォルダ	
Files	2014/04/26 19:13	ファイル フォルダ	
Indicators	2014/04/26 19:13	ファイル フォルダ	
Strings	2014/04/26 19:13	ファイル フォルダ	
MovingAverages.mqh	2014/07/30 1:30	MQH ファイル	9 KB
Object.mqh	2014/07/30 1:30	MQH ファイル	2 KB
stderr.mqh	2014/07/30 1:30	MQH ファイル	10 KB
stdlib.mqh	2014/07/30 1:30	MQH ファイル	1 KB
StdLibErr.mqh	2014/07/30 1:30	MQH ファイル	1 KB
WinUser32.mqh	2014/07/30 1:30	MQH ファイル	19 KB

Base class

2. 基礎の解析 (小さな一歩) ; スクリプトで試す

- 標準クラスの内容は膨大です、本稿ではその中の一部を解説します。(コツコツ解析中の成果)
#include 時のベース・フォルダである「MQL4¥Include」の中にある、
<ChartObjects¥ChartObjectsTxtControls.mqh> ファイルを覗いてみると、以下のような標準クラスが定義されています。

MQL4¥Include¥ChartObjects フォルダ内				
Object.mqh	ChartObject.mqh	ChartObjectsTxtControls.mqh		備考
曾祖父クラス	祖父クラス	親クラス	子クラス	
CObject	CChartObject	CChartObjectText	CChartObjectLabel	本稿で解説
			CChartObjectEdit	
			CChartObjectButton	
			CChartObjectRectLabel	本稿で解説
	Delete() と Description() 等は ここに在る			

※継承関係を理解しようとする「頭が痛くなります」が、コード作成時は「使える関数」は、コード入力時に候補として表示されます。(便利！)

例えば「CChartObjectLabel」クラスを使う場合には、このクラス内で定義されたもの以外にも、祖父クラスで設定された「Delete()」や「Description()」なども候補として表示されますし、コンパイルも通り、ちゃんと動作します。(#include を忘れたらダメです)

例 ; (候補表示)

```

7 #property link      "泉の森の弁財天池"
8 #property version   "1.00"
9 #property strict
10 //
11 // 参照する「標準クラス」記述ファイルをインクルード
12 #include <ChartObjects¥ChartObjectsTxtControls.mqh>
13 //
14 // Script program start function
15 //
16 void OnStart()
17 {
18     //---
19     // Labelの設定 -----
20     CChartObjectLabel *la_object;
21     la_object=new CChartObjectLabel;
22     //
23     la_object.Create(0,"Label",0,0,0);
24     //
25     la_object.X_Distance(100);
26     la_object.Y_Distance(100);
27     //
28     la_object.|
29     la_object. Create
30     // -----
31     CreateTime
32     Delete
33     Description
34     Detach
35     Fill
36     Sleep(3000
37     //オブジェ
38     la_object. Font
39     FontSize
40     PlaySound("alert");
41     //---
42     |
43 //+-----

```

(1) 「Label クラス ; CChartObjectLabel」 を使ってみる

- 1. コード

```

//+-----+
//|
//|                                     Class_Label_01.mq4
//|                                     amenbo
//|                                     泉の森の弁財天池
//+-----+
#property copyright "amenbo"
#property link      "泉の森の弁財天池"
#property version   "1.00"
#property strict
//
// 参照する「標準クラス」記述ファイルをインクルード
#include <ChartObjects¥ChartObjectsTxtControls.mqh>
//
// Script program start function
//
void OnStart()
{
    //---
    // Label の設定 -----
    CChartObjectLabel *la_object;
    la_object=new CChartObjectLabel;
    //
    la_object.Create(0, "Label", 0, 0, 0);
    //
    la_object.X_Distance(100);
    la_object.Y_Distance(100);
    //
    la_object.Description("GOOD!---WOW");
    la_object.Color(Blue);

    // -----
    ChartRedraw();
    //
    PlaySound("alert2");
    //
    Sleep(3000);
    //オブジェクトを削除
    la_object.Delete();
    //
    PlaySound("alert");
    //---
}
//+-----+

```

- 2. 結果

※ 「3秒」後に表示は消えます



(2) 「RectLabel クラス ; CChartObjectRectLabel」と「Label クラス」を一緒に使ってみる

- 1. コード

```

//+-----+
//|                                               Class_Label_03.mq4
//|                                               amenbo
//|                                               泉の森の弁財天池
//+-----+
#property copyright "amenbo"
#property link      "泉の森の弁財天池"
#property version   "1.00"
#property strict
//
// 参照する「標準クラス」記述ファイルをインクルード
#include <ChartObjects¥ChartObjectsTxtControls.mqh>
//
// Script program start function
//
void OnStart()
{
    //---
    // RectLabel の設定 -----
    CChartObjectRectLabel *rla_object;
    rla_object=new CChartObjectRectLabel;
    //
    rla_object.Create(0,"Label1",0,0,0,0,0);
    //
    rla_object.X_Distance(100);
    rla_object.Y_Distance(80);
    //
    rla_object.X_Size(100);
    rla_object.Y_Size(50);
    //
    rla_object.BackColor(clrLightCyan);
    //

    // Label の設定 -----
    CChartObjectLabel *la_object;
    la_object=new CChartObjectLabel;
    //
    la_object.Create(0,"Label2",0,0,0);
    //
    la_object.X_Distance(100);
    la_object.Y_Distance(100);
    //
    la_object.Description("GOOD!---WOW");
    la_object.Color(Red);

    // -----
    ChartRedraw();
    //
    PlaySound("alert2");
    //
    Sleep(3000);
    //オブジェクトを削除
    rla_object.Delete();
    la_object.Delete();
    //
    PlaySound("alert");
    //---
}
//+-----+
// 注記 ;
// 「.Description」は「CChartObjct」（2つ先の mqh ファイル）から継承

```

```
// 「.Color」も「CChartObject」（2つ先）から継承
// 2つ先から継承したものでも「コード」の候補としてコード入力時に候補として表示される！
/*
  調査中；
  CChartObjectRectLabel は四角いラベルを表示する。
  この上に「文字」を置くには CChartObjectLabel を使うしかないのか？
*/
```

※チョット、判らないことが残っているので「コード」中にメモしておきました。

－ 2. 結果

※やはり、「3秒」後に消えます。

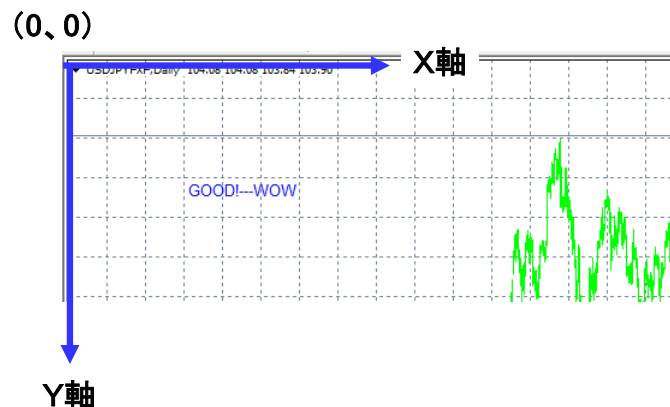


(3) コード解説

※「クラスの使い方」に関する基礎知識の解説は省略します。（参照可能な資料は山のようにあります）
本稿では、NewMQL4 標準クラス・ライブラリの使い方を中心に解説します。

－ 1. 座標系

標準クラスで扱うオブジェクトの配置では、デフォルトでは座標系を採用しています。
チャートの左上を「原点；(0, 0)」とし、下記に示す方向にX軸座標とY軸座標を設定します。（単位は通常ピクセルです）



この座標系、つまり原点 (0, 0) を「左上・左下・右上・右下」の何所に設定するかは変更が可能です。

ー 2. クラスを動的に確保する

C++では良く見かけるように、new 関数で動的に確保して使うのが一般的です。

```
CChartObjectLabel *la_object;
la_object=new CChartObjectLabel;
```

ただ、通常のC++言語と違うのが、new 関数で動的に確保したクラスのデータやメソッド（クラス内関数）を使うのに、NewMQL4（MQL5）では「アロー演算子；"->"」ではなく、「ドット演算子；"."」でアクセスするのが、一般的?のように観えることです。（MQL5のコードを観るかぎりですが）

```
la_object.Create(0,"Label",0,0,0);
```

ー 3. Label クラスのメソッド（関数）

※「Class_Label_01.mq4」で使用したもののみ解説します、

その他のメソッド（関数）については「ChartObjectsTxtControls.mqh」、または、「ChartObject.mqh」を参照ください。

メソッド（関数）／機能	引数とその内容
bool Create(long chart_id,const string name,const int window,const int X,const int Y);	
ラベル・オブジェクトを作成する	<ul style="list-style-type: none"> • long chart_id ;オブジェクトを配置（表示）する為替ペアのチャートNo、現在表示中の為替チャートなら「0」 • const string name ;オブジェクトの「名前」 • const int window ;オブジェクトを設定するウインドウ番号、メインウインドウなら「0」、1個目のサブウインドウならば「1」を設定 • const int X ;オブジェクトを配置する「X座標」 • const int Y ;オブジェクトを配置する「Y座標」 ※X、Yの単位はピクセル
bool X_Distance(const int X);	
bool Y_Distance(const int Y);	
	オブジェクトの配置座標を（X、Y）に設定する
※以下の3つは、「ChartObject.mqhのCChartObjectクラス」から継承しているメソッド	
bool Description(const string new_text);	
	• const string new_text ;テキストを記述する
bool Color(const color new_color);	
	• ラベルテキストのカラーを設定する
bool Delete(void)	
	• オブジェクトを削除する

※同じ名前のメソッドで、引数が「void」の場合は「その値を取得する」と、言うものが結構あります。

例；「int X_Distance(void)」はX座標を取得します。

- 4. RectLabel クラスのメソッド (関数)

※ 「Class_Label_01.mq4」と比較し、設定方法が異なるメソッド、および「Class_Label_03.mq4」で新たに使用したメソッドのみを解説します。

メソッド (関数) / 機能	引数とその内容
<pre>bool Create (long chart_id, const string name, const int window, const int X, const int Y, const int sizeX, const int sizeY);</pre>	
四角ラベル・オブジェクトを作成する	<ul style="list-style-type: none"> • long chart_id ; オブジェクトを配置 (表示) する為替ペアのチャート No、現在表示中の為替チャートなら「0」 • const string name ; オブジェクトの「名前」 • const int window ; オブジェクトを設定するウインドウ番号、メインウインドウなら「0」、1 個目のサブウインドウならば「1」を設定 • const int X ; オブジェクトを配置する「X座標」 • const int Y ; オブジェクトを配置する「Y座標」 • const int sizeX ; 四角ラベルの幅 • const int sizeY ; 四角ラベルの高さ <p>※X、Yの単位はピクセル</p>
<pre>bool X_Size(const int X);</pre>	
<pre>bool Y_Size(const int Y);</pre>	
	• 四角ラベルの大きさ (縦横) を設定する
<pre>bool BackColor(const color new_color);</pre>	
	• 四角ラベルのバックカラーを設定する

※注意 ;

RectLabel クラスでは「Create(0, "Label", 0, 0, 0, 0, 0)」と記述すべきところを「Create(0, "Label", 0, 0, 0)」と記述すると、エラーは出ませんが成城には動きません。

※名前が同じで、引数 (数やデータ型) が異なるメソッド (関数) がゴロゴロ存在していて頭が痛いです! (オーバーロードも使い過ぎると、訳わからん!)

※当たり前ですが、「標準クラス」で実現できることは、全て NewMQL4 の「標準関数」を使って実現できることばかりです。

でも、「標準クラス」を覚えて使う方が、コード作成が遥かに楽になります。(本当! です)

3. インディケータに拡張するには (ヒントのみ)

※スクリプトからインディケータに拡張するためのヒントとなるコードとその結果を示します、
解析と更なる拡張は読者にお任せします。(「2.」を読んだ読者には難しくはないはず)

(1) 「Label クラス」 + 「Button クラス」 の場合

ー 1. コード

```
//+-----+
//|                                                    Class_Label_indcator_01.mq4
//|                                                    amenbo
//|                                                    泉の森の弁財天池
//+-----+
#property copyright "amenbo"
#property link      "泉の森の弁財天池"
#property version   "1.00"
#property strict
#property indicator_separate_window
// 参照する「標準クラス」記述ファイルをインクルード
#include <ChartObjects¥ChartObjects¥TxtControls.mqh>
//
CChartObjectLabel *la_object;
CChartObjectButton *la_button;
//
// Custom indicator initialization function
//
int OnInit()
{
    //--- indicator buffers mapping
    // Label の設定 -----
    la_object=new CChartObjectLabel;
    //la_object.Create(0, "Label", 0, 0, 0);
    la_object.Create(0, "Label", 1, 0, 0);
    la_object.X_Distance(100);
    la_object.Y_Distance(100);
    la_object.FontSize(16);
    //
    // Button の設定 -----
    la_button=new CChartObjectButton;
    la_button.Create(0, "Button", 1, 0, 0, 0, 0);
    la_button.X_Distance(400);
    la_button.Y_Distance(100);
    la_button.X_Size(220);
    la_button.Y_Size(30);
    la_button.BackColor(White);
    la_button.BorderColor(Red);
    la_button.Description("pressed-->ASK   depressed-->BID");
    la_button.Color(Green);
    la_button.FontSize(10);
    //---
    return(INIT_SUCCEEDED);
}
//
void OnDeinit(const int _reason)
{
    //オブジェクトを削除
    la_object.Delete();
    la_button.Delete();
    //
    PlaySound("alert2");
}
//
// Custom indicator iteration function
//
int OnCalculate(const int rates_total,
```

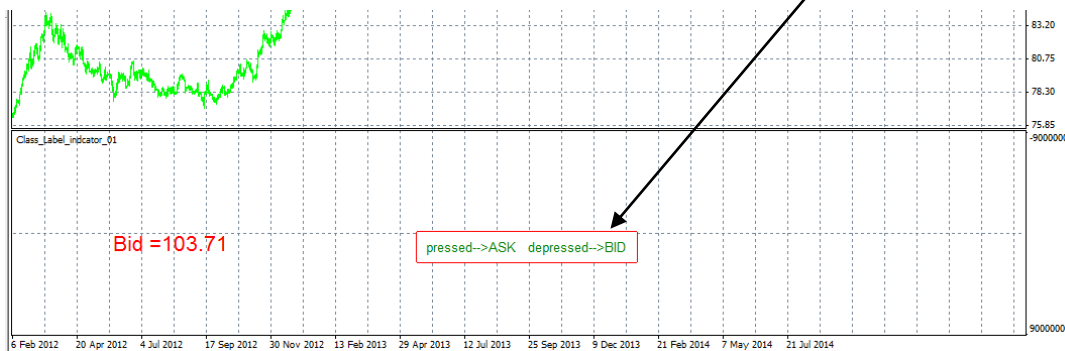
```

const int prev_calculated,
const datetime &time[],
const double &open[],
const double &high[],
const double &low[],
const double &close[],
const long &tick_volume[],
const long &volume[],
const int &spread[])
{
//--- return value of prev_calculated for next call
if(la_button.State()==true)
{
string price_1="Ask =" + DoubleToString(Ask, 2);
la_object.Description(price_1);
la_object.Color(Blue);
}
//
if(la_button.State()==false)
{
string price_2="Bid =" + DoubleToString(Bid, 2);
la_object.Description(price_2);
la_object.Color(Red);
}
//
PlaySound("alert");
ChartRedraw();
//
return(rates_total);
}
//+-----+

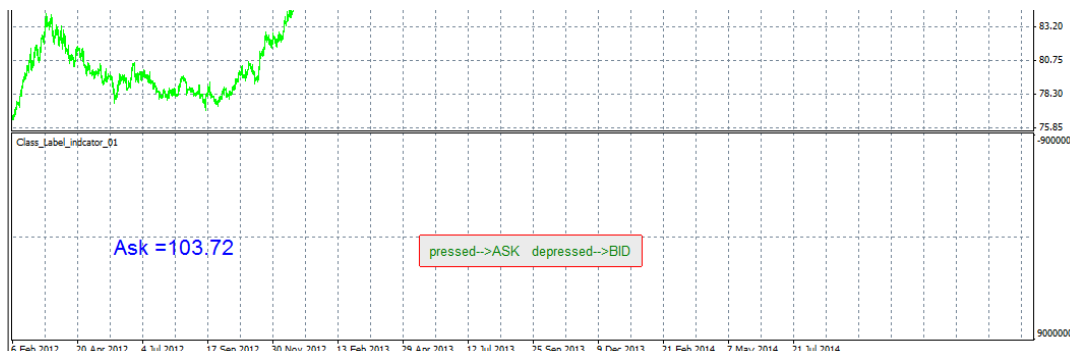
```

2. 結果

※ティック (Tick) が入る度に「Bid か Ask」を表示します。



※ティックが入った時、ボタンが OFF 状態では「Bid」を、ON 状態では「Ask」を表示します。
ボタンをクリックする度に「ON⇔OFF」が切替わります。



4. 実用的な応用例 (MQL5 の遺産から)

※出典 ; 「Create your own Market Watch using the Standard Library Classes」

上記資料は MQL5 Site 上にあります、A4 で 28 枚の分量 (多くは無い) ですが、
 解読するのに結構時間がかかります、筆者も未だ解析中です。

(判りやすい資料が余りにも少ないので、トレジャー・ハンターの気分です)

- ・上記資料には 2 つの「.mqh」ファイルが添付されており、当然「標準クラス」ではないのですが、その内の「textdisplay.mqh」が汎用タイプとして結構使えるので、本稿で使い方を紹介します。

※「2. 基礎の解析」で解説した内容から、かなり飛躍しますが、

「(出典) 資料内容の例」は非常に実用的なので、解説することにいたします。

(1) 本稿で実現する内容 (実現仕様)

- ・出典元の資料にあった表示例の 1 つです、ただ資料ではコードが汎用性の盛り込み過ぎで「読み取り難い」こと、及びコードの解説が「初心者向きで無い」(省略しすぎ) なので、本稿では「コードの単純化」と「解説の盛り込み」に注力しました。
- ・下記が「実現する表示」です。

左が通貨ペア、真ん中がその値、右端がスプレッドです



※なお、チャートの画面サイズを変えても、表示位置は変化しません。

(2) 準備 (ヘッダファイルの設定)

- ①本稿で使用する「textdisplay.mqh」ファイルは、出典「資料」に添付されています。
- ②上記の「.mqh」ファイルは「MQL4\FInclude」フォルダ内 (ベース・フォルダ) に入れてください。
 ※「textdisplay.mqh」は、添付の「.ZIP」ファイルに入れておきました。

名前	更新日時	種類	サイズ
Arrays	2014/04/26 19:16	ファイル フォルダ	
Canvas	2014/04/26 19:16	ファイル フォルダ	
ChartObjects	2014/04/26 19:16	ファイル フォルダ	
Charts	2014/04/26 19:16	ファイル フォルダ	
Controls	2014/04/26 19:16	ファイル フォルダ	
Files	2014/04/26 19:16	ファイル フォルダ	
Indicators	2014/08/06 1:23	ファイル フォルダ	
Strings	2014/04/26 19:16	ファイル フォルダ	
MovingAverages.mqh	2014/07/30 1:29	MQH ファイル	9 KB
Object.mqh	2014/07/30 1:29	MQH ファイル	2 KB
stderror.mqh	2014/07/30 1:29	MQH ファイル	10 KB
stdlib.mqh	2014/07/30 1:29	MQH ファイル	1 KB
StdLibErr.mqh	2014/07/30 1:29	MQH ファイル	1 KB
textdisplay.mqh	2012/04/25 14:42	MQH ファイル	16 KB
WinUser32.mqh	2014/07/30 1:29	MQH ファイル	19 KB

このフォルダにコピーします

※このベースフォルダに入れると、「#include <テキスト名>」で取り込めます。

※「textdisplay.mqh」には、コード中で使用する各種のクラスの定義が記載されています。

(3) 使用コード

```
//-----+-----
//|                                     PriceList_03.mq4 |
//|                                     amenbo         |
//|                                     泉の森の弁財天池 |
//-----+-----
#property copyright "amenbo"
#property link      "泉の森の弁財天池"
#property version   "1.00"
#property strict
#property indicator_chart_window
//
// ----- Custom indicator -----
//      Include libraries
#include   <TextDisplay.mqh>
//      External input parameters
input int   Y_2://Y方向のオフセット
input int   X_1://X方向のオフセット
//-----
TableDisplay      Table1;
//-----
#define NUMBER 8
//-----
string  names[NUMBER]={ "EURUSDFXF", "GBPUSDFXF", "AUDUSDFXF", "NZDUSDFXF", "USDCHFFXF",
                        "USDCADFXF", "USDJPYFXF", "EURJPYFXF" };
int      coord_y[ NUMBER ] = { 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7 };
//-----
double   rates[NUMBER];
datetime times[NUMBER];
MqlTick  tick;
//-----
int OnInit()
{
    ArrayInitialize(times, 0);
    ArrayInitialize(rates, 0);
    // -----Create table-----
    //      Set coordinates -----
    Table1.SetParams(0, 0, CORNER_LEFT_UPPER);
}
```

```

// Show headers -----
for(int i1=0; i1<NUMBER; i1++)
{
    Table1.AddTitleObject(40, 40, X_, Y_+coord_y[i1], names[i1]+" :", Blue);
}
// Show prices -----
for(int i2=0; i2<NUMBER; i2++)
{
    Table1.AddFieldObject(40, 40, X_+2, Y_+coord_y[i2], Blue);
}
// Show spreads -----
for(int i3=0; i3<NUMBER; i3++)
{
    Table1.AddFieldObject(40, 40, X_+4, Y_+coord_y[i3], Blue);
}

//
RefreshInfo();
ChartRedraw(0);
EventSetTimer(1);
//
return(0);
}
// Custom indicator iteration function -----
int OnCalculate(const int rates_total,
               const int prev_calculated,
               const datetime &time[],
               const double &open[],
               const double &high[],
               const double &low[],
               const double &close[],
               const long &tick_volume[],
               const long &volume[],
               const int &spread[])
{
    //--- return value of prev_calculated for next call
    return(rates_total);
}
// OnTimer event handler -----
void OnTimer()
{
    RefreshInfo();
    ChartRedraw(0);
}
// OnDeinit event handler -----
void OnDeinit(const int _reason)
{
    EventKillTimer();
}
// Delete table
Table1.Clear();
}
// Refresh info -----
void RefreshInfo()
{
    for(int i4=0; i4<NUMBER; i4++)
    {
        // Get price data
        bool tick_=SymbolInfoTick(names[i4], tick); // 「MqITick tick」に最新データをセットする処理
    }
}

```

```
//
if(tick.time>times[i4] || times[i4]==0)
{
```

```
Table1.SetText(i4+NUMBER, DoubleToString(tick.bid, (int)(SymbolInfoInteger(names[i4], SYMBOL_DIGITS)))));
    if(tick.bid>rates[i4] && rates[i4]>0.1)
    {
        Table1.SetColor(i4+NUMBER, Lime);
    }
    else if(tick.bid<rates[i4] && rates[i4]>0.1)
    {
        Table1.SetColor(i4+NUMBER, Red);
    }
    else
    {
        Table1.SetColor(i4+NUMBER, Blue);
    }
//
    rates[i4] = tick.bid;
    times[i4] = tick.time;
}

Table1.SetText(i4+NUMBER+NUMBER, DoubleToString((tick.ask-tick.bid)/SymbolInfoDouble(names[i4], SYMBOL_POINT), 0));
}
//+-----+
```

(4) 実行結果



※真中の列の「BID 値」は、上昇が「ライム色」、下降が「赤色」、変わらずを「青色」にしました。

5. 応用例の解説

※基礎知識、応用方法、クラスの継承など「TextDisplay.mqh」に係る解説をいたします。

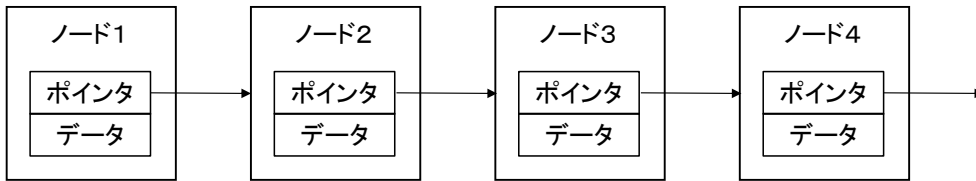
(1) 基礎知識 (TextDisplay.mqh を読み解くための)

※「TextDisplay.mqh、List.mqh」で使われている線形リストの基本をおさらいします。

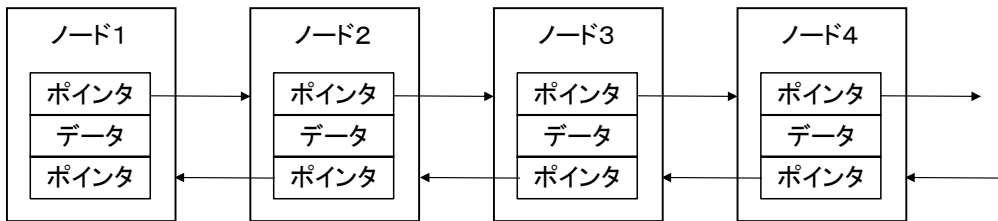
(と、言ってもC++初心者の筆者にとって初めての概念でしたので、間違いがあればご容赦)

ー 1. 「線形リスト」とは何か (大雑把に解説します)

- ・ 1次元配列と同様に、データの列を扱う
- ・ 線形リストは「データとポインタ」が入った「ノード」と呼ばれる要素を、そのノード中の「ポインタ」でつないだもの。
- ・ シングルリンク ; 「ノード」の「ポインタ」は、次の要素 (のアドレス) を指している。



- ・ ダブルリンク ; 「ノード」は次の要素のアドレスと、前の要素のアドレスを持っている



- ・ ポインタとは、その中に「アドレス」が格納されている領域です、
例 ; シングルリンクの場合、「ノード2」のポインタには「ノード3」の先頭アドレスが格納されているので、次々に「ノード」を辿ってデータを得ることが出来ます。

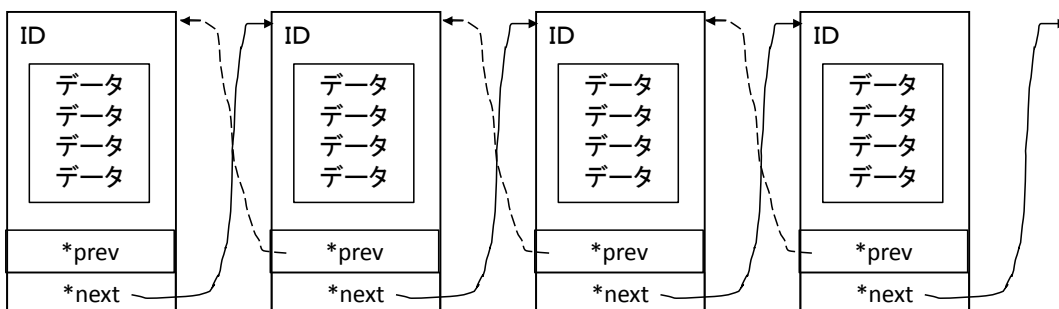
※より詳細な解説は、例えば以下の資料を参照ください。

「MQL5 Programming Basics: Lists」、[「Using the Object Pointers in MQL5」](#)

(少々難解なので、筆者も未だ一部を読んだだけです。)

- ・ 本稿では「ノード」1個に「データ」1個の「リスト」形式で使用していますが、構造体をポインタでつないで「リンク構造」にした場合は、「ノード」1個に複数個のデータを格納できます。

以下に構造体をリンク構造にした場合のイメージ (上記の資料より抜粋) を示します。



－ 2. 「テーブル」とは何か

※本稿で利用した「TextDisplay.mqh」で採用している「テーブル」の概念を解説します。

テーブルとは；

「チャート表示領域全体」を任意個の升目に区切って、例えばその内の特定領域、「ハッチング部」をデータの表示（収納）領域として設定したものです。

（あくまで、本稿での定義ですが）

- ・ テーブルの「1セグメント（1升目）」には、「1個のノード（ポインタとデータ）」が対応（収納）します。
データはラベル（テキスト形式）に変換され、表示されます。
- ・ テーブル上の特定セグメントをアクセスするときは、「行・列」（又は「列・行」）で指定します。

※1セグメントの拡大；

ノードNO. ・ポインタ ・データ;ラベル表示

- ・ そして、各「ノード」は線形リスト構造で繋がっています。
上の例で言えば「12個（＝4×3）」のノードがあり、それぞれに「データ；ラベル表示」が格納（表示）されています。

（2） 応用クラスを使ってテーブルを作成する

※ここで言う「テーブル」とは、

- ①特定のセグメント（＝ノード）にデータがラベルとして格納表示され、
- ②且つセグメント（ノード）は線形リスト構造をしている、ものである。

※応用クラスとは、「TextDisplay.mqh」で定義されているもの、として解説します。

－ 1. テーブルを作成する「応用クラス」には「2つ」のメソッドがあります

AddTitleObject(**)とAddFieldObject(**)ですが、両者の違いは下記のみです。

	ラベル表示データ	備考
AddTitleObject()	引数で指定したテキスト	後で書換え可能
AddFieldObject()	""；つまり空白	後で書換え可能

※データを引数で渡せるか否か、だけの違い。

ー 2. メソッドの具体的な使い方

※2つのメソッドをまとめて解説します。(違いは殆どありません)

[座標系指定メソッド] <TableDisplay クラス>

```
void SetParams(long _chart_id, int _window, ENUM_BASE_CORNER _corner=CORNER_LEFT_UPPER);
```

※引数が「3個」の SetParams です。(同じ名前で、引数の数が違うものあり)

long _chart_id; 為替ペアのチャートID、現在表示しているものなら「0」。
int _window; メインウィンドウは「0」、次のサブウィンドウなら「1」
ENUM_BASE_CORNER _corner=CORNER_LEFT_UPPER; 座標系を左上原点 (0, 0) のものに設定

[テーブル作成メソッド] <TableDisplay クラス>

<TTitleDisplay クラス>

```
int AddTitleObject(int _cols, int _lines, int _col, int _row, string _title, color _color,
                  string _fontname="Arial", int _fontsize=10);
```

<TFieldDisplay クラス>

```
int AddFieldObject(int _cols, int _lines, int _col, int _row, color _color,
                  string _fontname="Arial", int _fontsize=10);
```

int _cols, int _lines; ・チャートのフルサイズを任意個数の升目に分割します。
 横 (X軸方向) を「_cols」個に分割、
 縦 (Y軸方向) を「_lines」個に分割。
int _col, int _row; ・分割された升目の内、特定の升目 (セグメント) を指定します。
 「_col 行・_row 列」目の升目 (セグメント)

string _title; **AddTitleObject** の場合
 ・引数に設定したデータ (string _title) を「指定した升目」に
 ①ラベルとして表示し、
 ②データは線形リストのノードに格納し、
 ③最後にノード番号 (及びインデックス) を「+1」します。

AddFieldObject の場合
 ・「指定した升目」には、
 ①常に「" ; 空白文字」データをラベルとして表示し、
 ②データは線形リストのノードに格納し、
 ③最後にノード番号 (及びインデックス) を「+1」します。

color _color, string _fontname="Arial", int _fontsize=10;
 ・全てラベルとして表示するテキストの属性指定です。
 文字色、フォント、フォント・サイズ。

※AddTitleObject と AddFieldObject は、どちらも1回実行すると、
①ノードが1つ増えていき、
②インデックス (0 から始まる) も「+1」されます
実行する度に「線形リスト」の長さが増えていきます。

[テーブル内容の書換えメソッド、その他]

※AddFieldObject (実は AddTitleObject も) で設定したデータは、下記メソッドで書換える事が出来ます。

<TableDisplay クラス>

```
bool SetText(int _index, string _text);
```

int _index; インデックス番号で、ノードを指定します、
 インデックス番号は、下記の様に「0」から始まり、
 AddFieldObject か AddTitleObject を実行する度に「+1」されて行きます。
 (線形リスト構造で、データが繋がって行くわけです)

実行順	実行メソッド	ノード番号	インデックス番号 (_index)
1	AddTitleObject	1	0
2	AddTitleObject	2	1
3	AddFieldObject	3	2
4	AddFieldObject	4	3
5	AddTitleObject	5	4
6	AddFieldObject	6	5
7	AddFieldObject	7	6
8	AddFieldObject	8	7
9	AddFieldObject	9	8

※特定の「ノード」が、どの「升目 (セグメント)」に対応するのかは、
 「int _col, int _row」のセットで決めることに注意してください。

テーブル上の表示位置は、規則的に配置することもランダムに配置することも可能です

例 ; 左のセグメントは、
 _col = 4 行、_row = 3 列
 で、指定される。

string _text; ノード内の「データ (テキスト形式)」を「_text」に書換えます。

```
bool SetColor(int _index, color _color);
```

int _index; ノードを指定するインデックス番号
 color _color; 文字色を指定

(3) 少し詳細に応用クラスを解説する

※読者の参考用として、また筆者の記憶用として「TextDisplay.mqh」に係るクラスとその継承関係を解説・記録します。

(正直、かなり複雑なので、記録しておかないと忘れてしまいそうです)

－ 1. クラス継承規則など；

継承の書き方；

```
class 派生クラス名 : 継承修飾子 基底クラス名
{
};
```

継承修飾子の意味；

- public・・・基底クラスで設定したアクセス修飾子の設定をそのまま引き継ぐ
- protected・・・基底クラスでpublicだったものをprotectedにして引き継ぐ。他はそのまま。
- private・・・基底クラスのメンバを全てprivateで引き継ぐ。

※通常は、「継承修飾子=public」が殆ど。

クラス内メソッド（関数）の定義記載法；

```
class クラス名 : :メソッド（関数）名
{
};
```

－ 2. 「TextDisplay.mqh」にて定義したクラスの継承関係

<継承関係>

標準クラス；「MQL4¥Include」フォルダ中に収録されてる				応用クラス
先祖クラス	曾祖父クラス	祖父クラス	親クラス	クラス／・関数
Object.mqh	ChartObjects¥ChartObject.mqh	ChartObjects¥ChartObjectsTxtControls.mqh		textdisplay.mqh
CObject	CChartObject	CChartObjectText	CChartObjectLabel	TTitleDisplay
			CChartObjectEdit	TFieldDisplay
		Arrays¥List.mqh	CList	TableDisplay
		<ul style="list-style-type: none"> ・ SetParams() ・ AddTitleObject() ・ AddFieldObject() 		

※「**.mqh」はクラスが記述されているファイル名

※NewMQL4の全てのオブジェクトのご先祖は、「CObjectクラス」です。

そもそもNewMQL4のオブジェクトは、「CObjectクラス」の定義をみると判るのですが、「ノード」による「リンク構造」を採れるように定義されている。

(「Object.mqh」は内容が1頁しかないので、読んでみてください)

ー 3. 詳細なクラス継承関係と機能を解説します

※本節では、TableDisplay クラスの「AddFieldObject クラス」に焦点を絞り、理解するために必要な解説を試みます、と言っても、ただ列挙しているだけです。

```
<TextDisplay.mqh> より ;
//-----
//      Include libraries
//-----
#include      <ChartObjects¥ChartObjectsTxtControls.mqh>
#include      <Arrays¥List.mqh>
      . . . . .
//-----
protected:
    long          chart_id;
    int           sub_window;
    long          chart_width;           // chart width in pixels
    long          chart_height;         // chart height in pixels
    long          chart_width_step;     // chart width step
    long          chart_height_step;    // chart height step
    int           columns_number;       // number of columns
    int           lines_number;         // number of rows
      . . . . .
//-----
//      TableDisplay class (List of objects)
//-----
class TableDisplay : public CList
{
protected:
    long          chart_id;
    int           sub_window;
    ENUM_BASE_CORNER  corner;
public:
    void          SetParams(long _chart_id,int _window,ENUM_BASE_CORNER _corner=CORNER_LEFT_UPPER);
    int           AddTitleObject(int _cols,int _lines,int _col,int _row,string _title,
                                color _color,string _fontname="Arial",int _fontsize=10);
    int           AddFieldObject(int _cols,int _lines,int _col,int _row,
                                color _color,string _fontname="Arial",int _fontsize=10);

    bool          SetColor(int _index,color _color);
    bool          SetFont(int _index,string _fontname,int _fontsize);
    bool          SetText(int _index,string _text);
    bool          SetAnchor(int _index,ENUM_ANCHOR_POINT _anchor);
public:
    void          TableDisplay();
    void          ~TableDisplay();
};
      . . . . .
//-----
//      Add Edit Field object
//-----
int TableDisplay::AddFieldObject(int _cols,int _lines,int _col,int _row,
                                color _color,string _fontname,int _fontsize)
{
① TFieldDisplay      *field=new TFieldDisplay();
② field.Create( this.chart_id, this.sub_window, _cols, _lines, _col, _row );
③ field.Description( "" );
    field.Color( _color );
    field.Font( _fontname );
    field.FontSize( _fontsize );
```

```

    field.Corner( this.corner );
④ return(this.Add(field));
}

```

※「①②③④」以外の解釈は、読者への課題といたします。

.....

① 「TFieldDisplay *field=new TFieldDisplay();」の解説

機能；「fieldクラス」を「TFieldDisplay()クラス」から継承して動的に作成

② 「field.Create(this.chart_id, this.sub_window, _cols, _lines, _col, _row);」の解説

```

//-----
//      Create object
//-----
bool TFieldDisplay::Create(long _chart_id,int _window,int _cols,int _lines,int _col,int _row)
{
    this.curr_column=_col;
    this.curr_row=_row;
②-1 SetParams(_chart_id,_window,_cols,_lines);
②-2
return(this.Create(this.chart_id,this.GetUniqName(),this.sub_window,(int)(_col*this.chart_width_
step),(int)(_row*this.chart_height_step)));
}

```

.....

②-1 「SetParams(_chart_id,_window,_cols,_lines);」の解説

```

//-----
//Set object parameters
//-----
void TFieldDisplay::SetParams(long _chart_id,int _window,int _cols,int _lines)
{
    this.chart_id=_chart_id;
    this.sub_window=_window;
    this.columns_number=_cols; ※X軸方向の分割数
    this.limes_number=_lines;  ※Y軸方向の分割数
//get window width in pixels
※フルスクリーンの幅と高さをピクセル単位で取得
    this.chart_width=GetSystemMetrics(SM_CXFULLSCREEN);
    this.chart_height=GetSystemMetrics(SM_CYFULLSCREEN);
//calculate steps
※分割した場合の升目「1セグメント」の幅と高さを取得
    this.chart_width_step=this.chart_width/_cols;
    this.chart_height_step=this.chart_height/_lines;
}

```

②-2

「return

```

(this.Create(this.chart_id, this.GetUniqName(), this.sub_window,

```

```

(int)(_col*this.chart_width_step), (int)(_row*this.chart_height_step));」の解説
```

引数； 5個ある（6個の引数がある「② Create()」とは異なる）

・ (int)(_col*this.chart_width_step)、 (int)(_row*this.chart_height_step) ;

※「_col行、_row列」目の「セグメント」を指定している

機能； 指定する「セグメント」に「ラベル・オブジェクト」を1個配置する。

継承先； 「this.Create()」は<ChartObjectsTxtControls.mqh>から継承している

```
//+-----+
//| Create object "Label" |
//+-----+
bool CChartObjectLabel::Create(long chart_id, const string name, const int window,
                               const int X, const int Y)
{
    if(!ObjectCreate(chart_id, name, OBJ_LABEL, window, 0, 0.0)) ①-2-1 ; ラベルオブジェクト生成
        return(false);
    if(!Attach(chart_id, name, window, 1)) ①-2-2 ; 1個のアンカーでラベルを張り付ける
        return(false);
    if(!Description(name))
        return(false);
    if(!X_Distance(X) || !Y_Distance(Y)) ※ラベルを配置する座標の指定
        return(false);
    . . . . .
}
```

②-2-1 「ObjectCreate(chart_id, name, OBJ_LABEL, window, 0, 0.0)」の解説

・ObjectCreateはMQL4(MQL5)の標準関数；

使用法1； 「time/price」座標の使用時

```
bool ObjectCreate(
    long      chart_id,      // chart ID
    string    object_name,   // object name
    ENUM_OBJECT object_type, // object type
    int       sub_window,    // window index
    datetime  time1,         // time of the first anchor point
    double    price1,        // price of the first anchor point
    ...
    datetime  timeN=0,      // time of the N-th anchor point
    double    priceN=0      // price of the N-th anchor point
);
```

使用法2； 「X/Y」座標の使用時・本節ではこちらを使用

```
bool ObjectCreate(
    long      chart_id,      // chart ID
    string    object_name,   // object name
    ENUM_OBJECT object_type, // object type
    int       sub_window,    // window index
    int       x_ccordinate,
    int       y_ccordinate
);
```

※本節の場合では「ObjectCreate(chart_id, name, OBJ_LABEL, window, 0, 0)」の様に、
(x, y) = (0, 0)と設定し、「ラベル・オブジェクト」を一旦生成後に、
「X_Distance(X座標；ピクセル)、Y_Distance(Y座標；ピクセル)で位置を再設定している。

②-2-2 「Attach(chart_id, name, window, 1)」の解説

継承先； 「Attach()」は<ChartObject.mqh>から来ている

機能；生成したラベル・オブジェクトを「1個」のアンカーで指定位置に張り付ける。

```
protected:
    long      m_chart_id;    // identifier of chart the object belongs to
    int       m_window;     // number of subwindow (0 - main window)
    string    m_name;       // unique name object name
    int       m_num_points; // number of anchor points of object
    . . . . .
```

```

//+-----+
//| Attach object |
//+-----+
bool CChartObject::Attach(long chart_id, const string name, const int window, const int points)
{
//--- check
    if(ObjectFind(chart_id, name)<0)
        return(false);
//--- attach
    if(chart_id==0)
        chart_id=ChartID();
    m_chart_id =chart_id;
    m_window   =window;
    m_name     =name;
    m_num_points=points;
//--- successful
    return(true);
}

```

③ 「field.Description("");」の解説

継承先； 「Description()」は<ChartObject.mqh>から来ている（継承する）

機能； ラベルに「” ; 空白文字」を書き込みます

```

//+-----+
//| Set comment of object |
//+-----+
bool CChartObject::Description(const string new_text) const
{
//--- check
    if(m_chart_id==-1)
        return(false);
//--- tune
    if(new_text=="")
        return(ObjectSetString(m_chart_id, m_name, OBJPROP_TEXT, " "));
//--- result
    return(ObjectSetString(m_chart_id, m_name, OBJPROP_TEXT, new_text));
}

```

※「ObjectSetString()」は標準関数、③ではテキスト・オブジェクトを張り付けている。

```

bool ObjectSetString(
    long   chart_id,      // chart identifier
    string name,          // object name
    int    prop_id,       // property
    string prop_value     // value
);

```

④ 「return(this.Add(field));」の解説

継承先； 「Add(field)」は<List.mqh>から来ている（継承する）

機能； 「線形リスト」に新規「ノード」として継ぎ足します

```

//+-----+
//| Adding a new element to the end of the list |
//+-----+
int CList::Add(CObject *new_node)
{
//--- check
    if(!CheckPointer(new_node))
        return(-1);
}

```

```
//--- add
if(m_first_node==NULL)
    m_first_node=new_node;
else
    {
        m_last_node.Next(new_node);
        new_node.Prev(m_last_node);
    }
m_curr_node=new_node;
m_curr_idx=m_data_total;
m_last_node=new_node;
m_data_sort=false;
//--- result
return(m_data_total++);
```

その他（一部クラス）の補足解説；

「SetText()」の解説

```
//-----
//          Set text
//-----
bool TableDisplay::SetText(int _index, string _text)
{
    CChartObjectText *object=GetNodeAtIndex(_index); A
    if(object==NULL)
    {
        return(false);
    }
    return(object.Description(_text)); B
}
```

A部；

継承先；「GetNodeAtIndex(_index)」は<List.mqh>から来ている（継承する）
機能；インデックスから「ノード番号」を得て、その「ノード」内のデータとして、
テキスト・データを書き込む。

B部；

「③の解説」と同じ

(4) 使用コード (PriceList_03.mq4) をブロック単位で把握する

※コードの理解に役立ちそうな「コメント」を入れておきます。

```

//+-----+
//|                                     | PriceList_03.mq4 |
//|                                     | amenbo       |
//|                                     | 泉の森の弁財天池 |
//+-----+
#property copyright "amenbo"
#property link      "泉の森の弁財天池"
#property version   "1.00"
#property strict
#property indicator_chart_window
//
// ----- Custom indicator -----
// Include libraries
#include <TextDisplay.mqh>
// External input parameters
input int   Y_=2; // Y方向のオフセット
input int   X_=1; // X方向のオフセット
//-----
TableDisplay Table1;
//-----
#define NUMBER 8
//-----
string names[NUMBER]={ "EURUSD FXF", "GBPUSD FXF", "AUDUSD FXF", "NZDUSD FXF", "USDCHF FXF",
                       "USDCAD FXF", "USDJPY FXF", "EURJPY FXF" };
int     coord_y[ NUMBER ] = { 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7 };
//-----
double   rates[NUMBER];
datetime times[NUMBER];
MqlTick tick;
//-----
int OnInit()
{
    ArrayInitialize(times,0);
    ArrayInitialize(rates,0);
    // ----Create table----
    // Set coordinates -----
    ※座標系を設定します「左上が原点 (0,0)」
    Table1.SetParams(0,0,CORNER_LEFT_UPPER);

```

	インデックス No	ノード No
為替ペア名	0	1
		2
為替ペア名	7	8
BID 値	8	9
		10
BID 値	15	16
スプレッド	16	17
		18
スプレッド	23	24

処理内容 ;

- 24個 (8×3) のデータを「線形リスト」の「ノード」として、次々に繋げていく。
- 各「ノード」の表示位置 (テーブル内の) を同時に設定しています。

```

// Show headers -----
for(int i1=0; i1<NUMBER; i1++)
{
    Table1.AddTitleObject(40,40,X_,Y_+coord_y[i1],names[i1]+" : ",Blue); ※為替ペア (8個)
}
// Show prices -----
for(int i2=0; i2<NUMBER; i2++)
{
    Table1.AddFieldObject(40,40,X_+2,Y_+coord_y[i2],Blue); ※BID データ (8個)
}
// Show spreads -----
for(int i3=0; i3<NUMBER; i3++)
{
    Table1.AddFieldObject(40,40,X_+4,Y_+coord_y[i3],Blue); ※スプレッド (8個)
}

```

```
//
RefreshInfo();
ChartRedraw(0);
EventSetTimer(1); ※タイマーを「1秒」にセット
//
return(0);
}
```

```
// Custom indicator iteration function -----
int OnCalculate(const int rates_total,
               const int prev_calculated,
               const datetime &time[],
               const double &open[],
               const double &high[],
               const double &low[],
               const double &close[],
               const long &tick_volume[],
               const long &volume[],
               const int &spread[])
{
    //--- return value of prev_calculated for next call
    return(rates_total);
}
```

インディケータなので、
形式的に置いてあるだけ！
(何もしない)

```
// OnTimer event handler -----
void OnTimer()
{
    RefreshInfo();
    ChartRedraw(0);
}
```

「1秒」ごとに、
BID 値とスプレッドを最新内容に
書換える

```
// OnDeinit event handler -----
void OnDeinit(const int _reason)
{
    EventKillTimer();
    // Delete table
    Table1.Clear();
}
```

```
// Refresh info -----
void RefreshInfo()
{

for(int i4=0; i4<NUMBER; i4++)
{
// Get price data
bool tick_=SymbolInfoTick(names[i4], tick); // 「MqlTick tick」に最新データをセットする処理
//
if(tick.time>times[i4] || times[i4]==0)
{

Table1.SetText(i4+NUMBER, DoubleToString(tick.bid, (int)(SymbolInfoInteger(names[i4], SYMBOL_DIGITS))));

if(tick.bid>rates[i4] && rates[i4]>0.1)
{
Table1.SetColor(i4+NUMBER, Lime);
}
else if(tick.bid<rates[i4] && rates[i4]>0.1)
{
Table1.SetColor(i4+NUMBER, Red);
}
else
{
Table1.SetColor(i4+NUMBER, Blue);
}
//
rates[i4] = tick.bid;
times[i4] = tick.time;

}

Table1.SetText(i4+NUMBER+NUMBER, DoubleToString((tick.ask-tick.bid)/SymbolInfoDouble(names[i4], SYMBOL_POINT), 0));

}

}
//+-----+
```

• 直接に MQL4 形式の「Bid」を使って記述して良かったが、
MQL5 の資料からもってきたので、
MqlTick tick を使った。

• Bid 値を入れた「ノード」の番号は「9」から始まり、
インデックス No では「8」から始まることに注意。
• 従って「Table1.SetText(i4+NUMBER, . . .)」となる。

• スプレッド値が格納された「ノード」のインデックス No は「16」から始まる

以 上